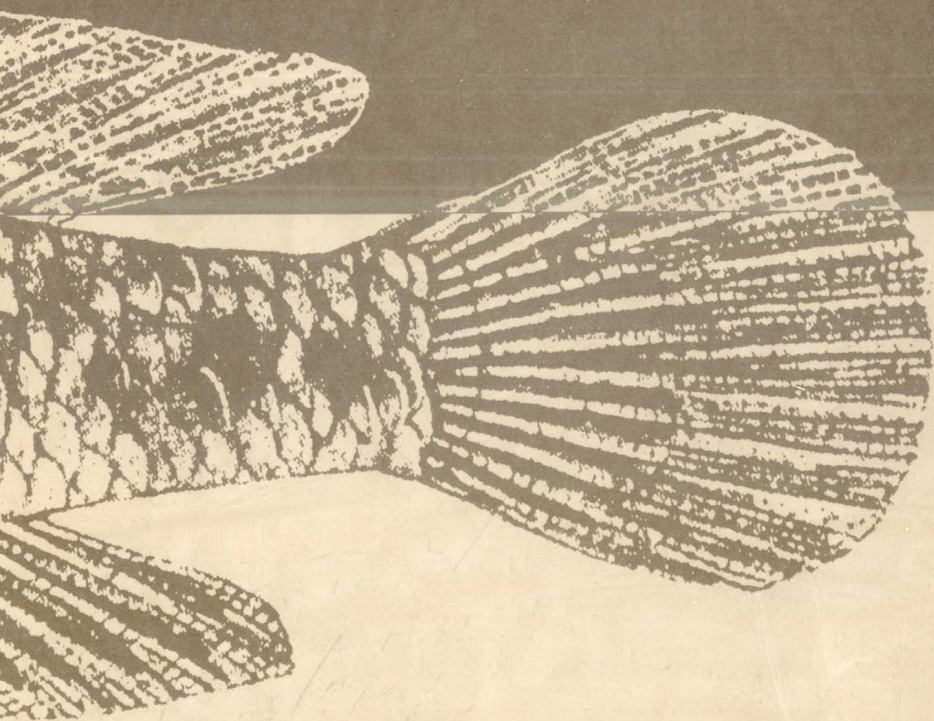
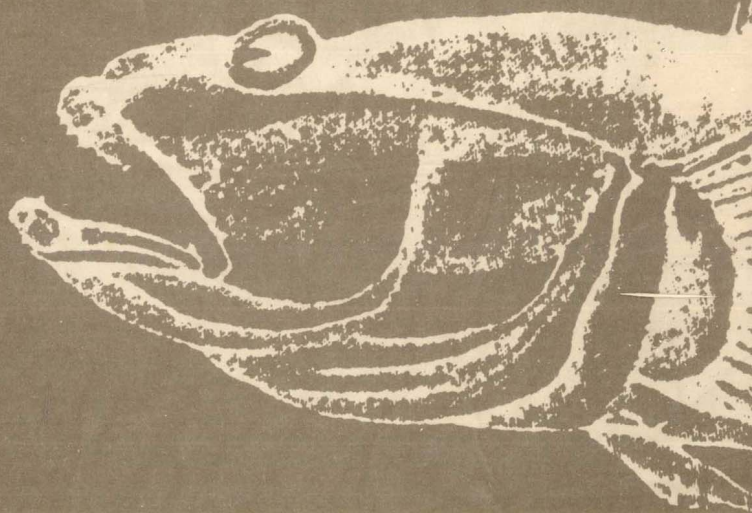


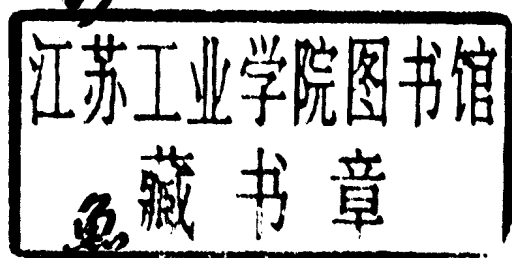
沙 魚



1990 瀬々倉 卓 治

詩
集

沙



瀬
々
倉
卓
治

著者略歴

著者 瀬々倉 卓治(せせくら・たくや)
1930年 横浜市西区浅間町に生れる
1951年 川柳作家・中野懐窓に師事
川柳「路」・同人
1957年 川柳「天馬」・同人
1968年 詩誌「匹」・同人
1974年 現代詩研究「天の会」会員
1975年 詩誌「掌」・同人
1980年 読売新聞・県版川柳欄選者
現住所 〒220 横浜市西区浅間町2-109-13

詩集 沙 魚

1990年10月1日発行 定価 2,000円

著 者 瀬々倉 卓 治
発行者 岸 田 和 子
発行所 鞆(ふいご) 社
印 刷 神奈川新聞社出版局
横浜市中央区太田町2-23

詩
集

沙

魚

庶民的人情を基盤とした先鋭詩人

すみさちこ

瀬々倉さんとの出会いは、彼が井手文雄氏を囲む数人の談話会を中心になってまとめた時期で、現在の「天の会」の創成期であった。メンバーのなかに大石規子、正田 澄がいて、たまたま二人が出席できない代替として私と赤穂文子が会の性格も成り立ちも理解しないまま出かけた。その会の冒頭で司会者である彼が「この会は、神奈川新聞の文芸コンクール、或いは市民文芸、勤労者文芸などのコンクール入選者を基準として成り立つ」といった主旨をのべた。私と赤穂文子はその時点では無資格であったのだ。場違いな場所に出てきてしまったことに赤面しながら、鼻柱だけは強かったわけで「いいわよ、今度のコンクールに受かってやろうじゃないの」とおとなしい赤穂文子を相手に息巻いた昔が懐かしい。翌年、神奈川新聞のコンクールに初挑戦して二人とも資格を得た形になったが、瀬々倉さんは比較的ものを曖昧にせず伝えるたちで、遠回しな言い方をしては摩擦をさけたがる処世術からみると誤解もされかねないところがある。しかし、井手文雄御大を頭上に掲げ、とけた靴ひものようなおんぶにだっこの集団を六年間引つ張ってきたのは、落語の熊さん、八つつあんの人情の世界そのままの彼の情の深さ、孝心である。たいへんな照れ屋で、金ピカの正義も愛情も面と向かつては逆説という形で表現される。その逆説のな

かにそうでないものも混じるので見分け方がむづかしい。私などは彼の思いの如何を問わず自分の都合の良いように受け取っているが、それも温情で許してくれているらしい。

瀬々倉さんにとって現代川柳は本妻であり、詩は想い人であるようにおもう。本妻の質の高さも自分にとっての必要性もわかっていてまだ、わがままでヤクザな想い人を恋う心をどうしようもないのではないだろうか。貢ぐだけ貢いで自分からはいつさいの要求をしていない。これだけの戦果を持ちながら詩人としての存在はアッピールされていない。

詩に対する彼には常に少年のような初々しいはにかみがある。

文学を細かなジャンルにわけお互いに妙に排他的であるのはつまらないことだ。川柳も詩も能くして、彼のそのスケールをこそ私は羨ましく思う。

彼はいま百歳の老父を抱え、その介護の夫人に夜は替わって生活のパターンを変え随分と早寝である。その夫婦愛、親子愛が彼の基盤である。彼の人間的な優しさに私は長いこと甘えさせてもらっている。

この詩集を機に瀬々倉さんが詩人の仲間にも入って、いつもの皮肉な逆説をもって論じ合う機会がふえることを心から願っている。

庶民的人情を基盤とした先鋭詩人 すみさちこ

神	夏の記憶	銀河	羊	感状	焼土	山河	沙魚	月光	光りのなかで	柵の外で	複合汚染	猪のいる風景	未明
兵													
	10	12	13	14	15	16	18	20	22	24	26	28	29
点	つぎ湯	下剋上	湯釜	伽藍	紙ナイフ	蛇口	風雪	縄	窓	方舟	日時計	ふるさと	夏
描													
	32	32	33	33	34	34	35	35	36	37	38	39	40

と ぎ ま	佐 渡 情 話	流 転	少 年	麦 秋	平 衡 感 覚	樹	小 鳥	沈 む 海	掘 井 戸	夏 の 日	音	残 照	地 上	と れ 秋	山 頭 火	記 念 日	友 情
-------------	------------------	--------	--------	--------	------------------	---	--------	-------------	-------------	-------------	---	--------	--------	-------------	-------------	-------------	--------

56	55	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	46	45	44	43	43	42	41
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

銃 口	風 景	臨 月	罇	め ん ど り の う た	童 話	猪	父 母 へ ・ 龍	父 母 へ ・ 兎	光 芒	三 番 叟	兎 の 話	早 春	忘 備 録	日 の 丸	家 紋	ま ん だ ら	御 楯
--------	--------	--------	---	---------------------------------	--------	---	-----------------------	-----------------------	--------	-------------	-------------	--------	-------------	-------------	--------	------------------	--------

84	80	78	77	76	74	72	71	70	68	66	64	62			59	58	58	57
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	--	--	----	----	----	----

子・むだい	86
父・むだい	88
母・むだい	90
四季	
英連邦墓地周辺	94
地上	96
跋	
あとがき	

う	98
牛	
榎	100
う	102
榎	103
吉見観音	104
秋	105
渚	
山田	
今次	

神

兵

夏の記憶

正座した膝から崩れ落ちる海に
粛々と走る風を
数えてとまる

胸郭の空に
のけぞって消えた
少年の
自決でない他決の
花びらを
数えてとまる

母は
したたる血をはらい
ひとつのかたちした鳥たちの
鳥たちでない神兵の
撃たれて散った

紙魚よりうすい肢体を
渚にすくう

風の中の

語り部

ことごとく子が墜ちた

外道の空から

いまも

棺を覆うまで降りやまぬ

花びらに埋もれて

銀 河

かくし絵のなかで
犬は

被爆したまま

ひとよりも

あえかに

日めくりをくぐる

あの日から

夏の日

冬の日

峠をいくつ越えても

行きつく街のない

無辜の絵日傘が

はるかな

シリウスで

犬たちと炎えている

羊

空につながる若草を喰べつく
すまでひとは日時計の姿して
熱いまなざしで待ってくれる

放牧のそれから先は知らない

記憶喪失をしあわせに思う日
繙いてもバイブルに文字はな
く敷きつめた踏絵の隙き間さ
え踏絵ばかりの丘だから春を
証しする仲間たちの撃たれた
血痕だけを明るい薔薇のよう
に秘かな備忘録に挿しておく

感 状

杜よりも緑が深く見え

海よりも潮がせつなくこみあげて溢れた

仰ぐ 天の額縁に

身を挺して果てた男の名前が

いまもふるえている

天皇の膝など

どこにもなかった

いちまいの紙を漉きながら

靖国のおんなが

置き去りにされている